明治大正夜話 (71)

玉塚天保と天保銭教(下)

阿達義雄

玉塚栄次郎氏が、その成功の後、人々に配った紙片を読んでみると、玉塚氏が商店に奉公をしていた小僧時代に遠方に用事にやられた場合、昼食代として、その都度、主人から天保銭二枚ずつ貰っていたことが知られる。

これは明治五年以降のことと考えられるから、天保銭の通用価格は八厘であり、一文銭は十文通用で、一厘と同じであった。

なお、これを明治二十年頃と考えるなら、「もりかけ一銭」であり、牛飯も一杯一銭位であったから、天保銭二枚なら一銭六厘で、蕎麦でも牛飯でも一杯で我慢をすれば六厘だけ残ったはずである。

玉塚少年は、その時その全部は使わず、必ずその幾分かを貯めて置いて、後々の独立のために備えたということ――これは都会の商家に奉公していた小僧としては感心な方であったであろう。

ただ、玉塚少年の場合、天保銭を握って之を有難く思っているうちに、金銭一般からではなく、この天保銭という――他の人々から八文として軽蔑されていた――銭から自分の世渡りや生き方についての教訓を感得し、発見すると共に天保銭を自分の御守りのように肌身を離さずにきたという点に彼の独自性があり、天保銭も道徳的、信仰的なものにまで昂められたことになる。

すなわち、普通の者が軽侮していた「一銭に足りない八文」を自分自身の身と考えて、当百＝百文＝一銭になろうとして精進努力し、また一方では八文であることを自覚戒心して、ややもすれば慢心したり、時には立腹したりしようとする自分を抑制することが世渡りの道だと悟って、世に処してきたというのである。

商人であった彼が都会的な金銀尊貴の唯物的思考に陥らず、誰もが愚弄し軽蔑していた八文の銅銭の天保銭を自己の心とする唯心的実践哲学に悟入したことは嘆賞に値することであろう。

したがって、玉塚氏が天保銭に彫った『天保銭は吾が鏡』の語句は、右の天保銭の教訓が自分の信仰として昂められたものであり、『天保銭は人の鏡』の語句は天保銭の教えを自分だけでなく、一般の人々にも押し及ぼそうとしていたことを語るものである。

言わば、玉塚栄次郎氏は天保銭教の教祖であり、天保銭教を広く一般人にも伝えようとしていた程であるから、これを先ず自分の経営する玉塚商店の社則として、その社員達の指針としたのであった。

この社則を熟読してみると玉塚氏が、一条毎に「己を天保銭と思ひ」と繰り返していることによって、天保銭を自己の外にある貨幣や物質としてではなく、自己の心として内在しているものと考えようとしていたことが理解される。

したがって、これは玉塚商店の社則などというよりは、天保銭教の経文とでもいうべきものである。すなわち、それは、

〔天保銭教の経文〕

一、己を天保銭と思ひ、その形の方円なるが如く、常に人に対する円満を以てし、中心方正にして而かも空虚なるが如く、即ち、確たる心腹に蟠りなく虚心坦懐、業務に励む事

二、己を天保銭と思ひ、知徳才能の足らぬ未熟な人間と思ひて、慢心、怒り、不平を起さぬ事

三、己を天保銭と思ひ、己の足らぬ所を省み、之を補ひて当百の人間にならんと、努力する心を失はぬ事

四、己を天保銭と思ひ、己の慾の十分を願はず、八分目に満足して、二分は将来に預け置くものと思ふ事

五、己を天保銭と思ひ、一枚八文ほどの端金も、すべて宝と思ひて軽々しく振舞はぬ事

六、己を天保銭と思ひ、常に資財を八分目に費し、二分の余裕を将来の為に蓄へる事

七、己を天保銭と思ひ、金の用ふべき場合をよく弁へ無益に使ふ金を惜しみ、有益に使う金をおしまぬ事

八、己を天保銭と思ひ、何事も一時に十分の効を思はず、急がず、撓まず、着実に進んで己の今日あるを喜ぶ

（新潟大学名誉教授）

森山八郎氏所蔵の玉塚天保の拓本

ご協力ありがとうございました

さきごろ行った「アンケート調査」の回収率が六八・七%に達しました（二月二十二日現在）。これは過去三回行った調査の中でも最高の回収率です。

いま集計作業を急いでいるところですが、結果がまとまり次第、広報でもご紹介していく予定です。

調査にご協力いただいた皆さんに、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

お買物、ご用命は市内で

室内装飾・美術表装・襖・壁・額
表具 一心堂
一級技能士 訓練指導員 鈴木正義　本町3 ☎2-2035

ガスもれを光と音でお知らせします
((((都市ガス警報器))))
新潟県ガス協会認定品　CZ-125 7,900円　YP-810 6,900円
お取付のご用命は
越後天然ガス㈱ TEL(4)2171